

世界各国の高校生が英語で水問題を議論

① 洪水、洪水が「Water is Life」を開催

世界各国の高校生が水資源をめぐる問題について英語で議論する国際会議「Water is Life 2018」(渋谷教育学園主催、サビックス・代ゼミグループ特別協賛)が、7月24日(火)～28日(土)の5日間、渋谷教育学園渋谷中学・高等学校と同幕張中学校・高等学校を主会場に開かれました。会議には両校から2チームずつ参加したほか、ポランテアとしてたくさんさんの生徒が運営に携わりました。また、開会式や閉会式、日本文化紹介ではいろいろなクラブも協力しました。

プレゼンなどを通して 各国の「水問題」を共有

「国際高校生水会議」は、高校生による「水」に関する国際会議。2014年はRaffles Institution (シンガポール)が、2016年はMaurick College (オランダ)が、そして第3回となる今回は渋谷教育学園がホスト校となりました。

会議はホスト校が大会全体のプログラムを作成し、世界各国の高校に参加を呼び掛ける形で進められます。今回は日本、アメリカ、ドイツ、中国、ブラジル、南アフリカ共和国など18か国から29校43チーム(137名)が参加。日本からは渋谷教育学園渋谷高等学校と同幕張高等学校のほか、東京学芸大学附属国際中等教育学校、公文国際学園高等部などから6校10チームが参加しました。

参加チームは、まず、水に関する自国の問題について、さまざまな角度からリサーチを行い、その成果を英文のレポートにまとめ、大会前に

提出。専門家の審査を受ける一方、会期中に行われるオーラル・プレゼンテーションやポスターセッションを通じて参加者全員で共有します。

5日間にわたって行われた今回の大会は、初日と2日目が渋谷中学・高校で、3日目から最終日の5日目までが幕張中学・高校で行われました。初日は、林芳正・文部科学大臣のあいさつの後、基調講演、パネルディスカッションと進み、午後は、参加者同士の交流を図ろうと、国や学校、チームをばらばらにして再構成したグループで、水にまつわる都内のスポットを回りました。

2日目は午前中がオーラル・プレゼンテーション。渋谷中学・高校の体育館を使って



幕張中高校で行われたポスターセッション



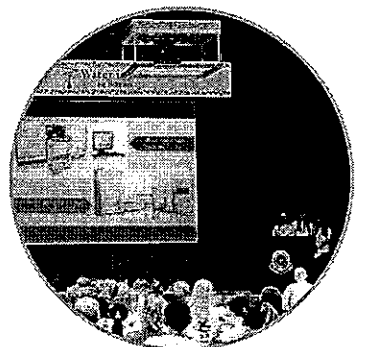
日本文化紹介では、海外の高校生に「書道」など日本文化の魅力を紹介

事前審査で選ばれた6チームが10分間ずつのプレゼンと質疑応答を行いました。そして、午後は有明水再生センターの見学と水上バス・クルーズ。また、会場を幕張中学・高校に移しての3日目は、三つの教室を使ってのオーラル・プレゼンテーションと図書館棟でのポスターセッションが続きました。

運営スタッフとして約550名の一般の生徒も参加

4日目はラムサール条約にも登録されている習志野市の谷津干潟の見学やワークショップ、日本文化体験などを実施。最終日は、午前中に参加者同士が親睦を図る国際交流。最後に、優れたレポートやプレゼンテーションなどを表彰する総会が行われ、閉幕となりました。

さて、大会の大きな特徴は、こうしたすべてのプログラムを英語で行うこと。有明水再生センターや谷津干潟の見学などでも、案内や内容の説明はすべて英語です。そして、こ



2日目は選ばれた6チームによるオーラル・プレゼンテーション

これらの企画の運営(司会・進行・受付等)には渋谷高校と幕張高校の1・2年生約550名が携わりました。たとえば、有明水再生センターや谷津干潟の見学ツアーでは、グループごとに生徒が1人ずつガイドとして付きまわりました。幕張中学・高校の教頭の深村誠先生によると、「事前に何回も現地へ足を運び、勉強会を開いて情報を共有しました。実際のガイド役の方の案内を英語に翻訳して覚えたり、英語版の案内シートを作成したりしました」とのこと。

また、大会初日の都内の水スポットの探索では、渋谷高校のクイズ部の部員が興味を持って見学できるようにと英語でクイズを出題しました。4日目の日本文化体験では幕張高校の茶道部や書道部が、やはり英語で日本文化を紹介するなど、いろいろなクラブも協力しました。「国際会議にはすごい力がありますね。大変でしたが、生徒たちには実体験に基づく感動が残りました」と話す深村先生。多くの生徒が「もっと英語を勉強したい」と話しているそうです。